

# 野菜茶業研究所ニュース

No.17 2005.12

## CONTENTS

表紙	●新部材・新工法による施設園芸用大型鉄骨ハウスの実用モデル	1
視点	●野菜における環境保全型技術の開発	2
研究情報	●①キャベツの結球葉の硝酸塩含量が低い理由	3
	②超低コスト高軒高大型ハウスの開発	
	トマト産地リニューアルに向けて	4
	③チャのクワシロカイガラムシに対する品種抵抗性とDNAマーカー	5
所の動き	●①高校生のための野菜研究体験セミナー	6
	②一般公開（金谷茶業研究拠点、武豊野菜研究拠点）	6
	③高度化事業合同成果発表会	
	「次世代型の耐候性ハウス・環境制御システム」	7
	④課題別研究会「新段階を迎えた臭化メチル規制とその対策技術」	7
	⑤課題別研究会「ブランドニッポン6系・野菜」成果発表会	7
	⑥課題別研究会「施設を中心とした野菜生産の多様な展開と対応する新技術の開発方向」	8
	⑦平成17年度革新的農業技術研修（高度先進技術研修）	8
	⑧特許・実用新案・著作権（出願）	8
	⑨育成者権（出願）	8
人の動き	●①異動、表彰、海外出張・派遣	9
	②特別研究員等、依頼研究員、技術講習	10



新部材・新工法による施設園芸用大型鉄骨ハウスの実用モデル

上：被覆終了時の外観、下：屋根ユニットの組み上がり状況

（4ページに関連記事）

# 視点

## 野菜における 環境保全型技術の開発

野菜研究官 萩原 廣

### はじめに

本年、自然の叡智を主題とし2,200万の入場者を数えた「愛・地球博」の終る頃、南極上空のオゾンホール面積は過去4番目の規模に達していました。オゾン層破壊物質の臭化メチルは代替技術への置き換えが進み、国内生産量は最盛期の1万トンの1割近くに削減されました。先進国の全廃年である本年からは不可欠用途対応のみとなりますが、環境問題は息の長い取り組みが要請されます。

### 環境保全型農業の推進

地球環境はかけがえがなく、自然の中で営む農業は「自然との共生」に向けて、環境に配慮した持続的な仕組みにしていく必要があります。環境保全型農業技術の確立をうたう「持続的農業法(平成11年)」、環境を重視する農林水産業への移行を示した「農林水産環境政策の基本方針(平成15年)」、農業者が環境保全に向けて最低限取り組むべき規範である「環境と調和のとれた農業生産活動規範(農業環境規範、平成17年)」は、この流れを推し進めるものです。

### 野菜での技術開発の方向

本年3月、新たな「食料・農業・農村基本計画」を受けて「農林水産研究基本目標」が改訂され、10年後を見通した重点課題が設定されました。野菜の環境保全型技術の開発は、「農林

水産業の生産性向上と持続的発展のための研究開発」の中で、主に「地域特性に応じた環境保全型農業生産システムの確立」に位置づけられています。

今後、この中で、地域特性に応じた生物機能等を利用した持続的な防除技術の開発、自然循環機能の高度発揮のための適正施肥技術の開発、省資材化技術のための抵抗性品種の育成、これらを総合した合理的な技術体系の確立を進めることとなります。

5年後の達成目標として、防除技術では、土着天敵と拮抗微生物利用の組合せによる施設栽培の総合的防除体系の開発と実証、ピーマンモザイク病等の弱毒ウイルス等利用による防除システムの開発、適正施肥技術では、作物による利用効率の高い土壌管理・施肥技術や有機物施用の野菜品質に及ぼす影響評価技術の開発、抵抗性品種では、根こぶ病等抵抗性育種素材・品種の育成、などが例示されています。この他、本年問題が吹き出したトマト黄化葉巻病を含め、課題は多数あります。

現在当所では、具体的研究内容を盛り込んだ次期中期計画の策定を進めています。農研機構内外の研究機関や行政部局と連携し、生産者はもとより広範な国民の理解が得られる環境保全型の野菜生産システムの確立に向けて技術開発を進める必要があります。

# キャベツの結球葉の硝酸塩含量が低い理由

## 研究のねらい

硝酸塩の過剰摂取が人体に悪影響を及ぼすことが懸念され、硝酸塩の摂取量を出来るだけ低く抑えることが望まれています。食事を通じた硝酸塩の主な摂取源は野菜であり、わが国で生産される葉菜類は含量が高い傾向にあることから、その含量を低くする生産技術の開発が進められています。しかし、同じ葉もの野菜でも、結球するキャベツやレタスは硝酸塩含量の低いことが知られています。そこで、その理由を明らかにすべく、キャベツの硝酸塩蓄積特性を調べました。

## 研究の成果

私たちは、ポット栽培のキャベツに<sup>15</sup>NでラベルしたKNO<sub>3</sub>を施用し、硝酸態窒素の動態を調べました。その結果、キャベツでは、根から吸収された窒素の多くが、一旦外葉に取り込まれ、その後、徐々に球へと移行することがわかりました(図1)。一般に、植物の根から吸収された硝酸は硝酸還元酵素の作用を受けて亜硝酸に還元され、さらに還元されてアンモニアと

なり、アミノ酸の原料の一つとなってタンパク質が合成されます。このため、キャベツの根から吸収され、外葉に移行した硝酸はアミノ酸やタンパク質へと分配されます(図2 A)。また、外葉から球に窒素が移行する時も、窒素は主にアミノ酸と蛋白質に分配されるため、球では硝酸塩の蓄積は起こりません(図2 B)。その結果、球の硝酸塩は外葉に比べ1/3~1/4程度の低い含量となります。一方、受光量が低くなると葉の硝酸塩含量の増加することが広く知られています。しかし、遮光処理により受光量を変化させても、外葉と異なり球では硝酸塩の蓄積は見られませんでした(図3)。

## 活用面と留意点

これまでに私たちが調べた野菜はキャベツだけです。しかし、レタスなどの結球野菜はもとより、根菜類においても、その硝酸塩蓄積特性のため、私たちが摂取する球や根などでは硝酸塩の蓄積が起こり難いと考えられます。

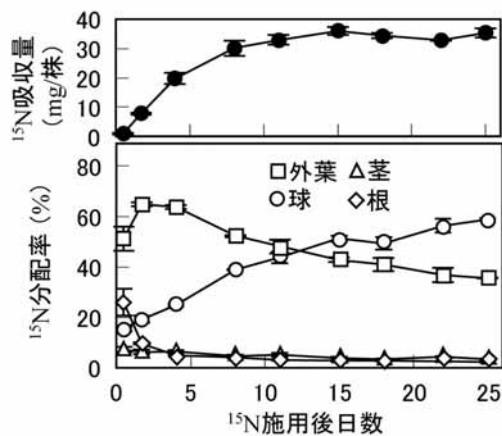


図1 結球期キャベツの<sup>15</sup>N-NO<sub>3</sub>-の吸収・分配パターン  
垂直線は標準誤差(n=3)

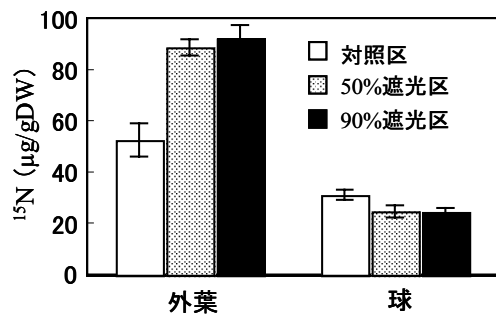
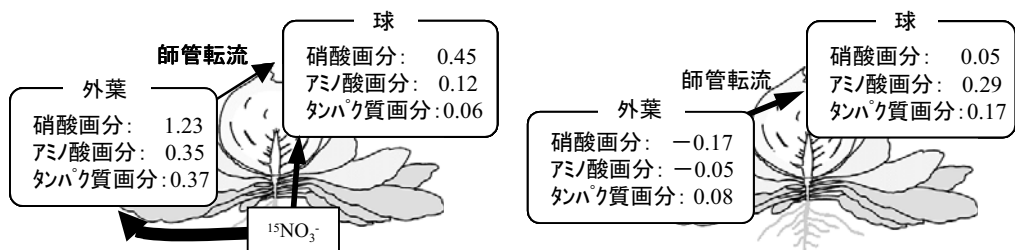


図3 遮光処理が外葉および球における硝酸画分の<sup>15</sup>N含量に及ぼす影響

垂直線は標準誤差(n=5)

遮光率50%および90%の黒色寒冷紗で株を覆って遮光した。遮光開始3時間後にK<sup>15</sup>NO<sub>3</sub>を施用し、遮光9日目に株を採取した。



A. <sup>15</sup>Nの移行が主に根からの吸収によって行われている時期(<sup>15</sup>N-NO<sub>3</sub>-施用後2日目まで)

B. <sup>15</sup>Nの移行が主に師管転流によって行われている時期(<sup>15</sup>N-NO<sub>3</sub>-施用後11日目から18日目まで)

図2 外葉および球における硝酸、アミノ酸、タンパク質画分の<sup>15</sup>Nの日変動量 (mg/day/株)

(葉根菜研究部・生産システム研究チーム長 東尾久雄)

# 超低コスト高軒高大型ハウスの開発 — トマト産地リニューアルに向けて —

## 研究のねらい

耐候性のある高軒高大型鉄骨ハウスは、周年栽培による高い生産性や快適な作業性が期待できますが、建設コストが高いため、低コスト化が望まれています。そこで、ハウス本体の建設コストを大幅に低減するため、企業・大学等との共同研究により、部材・工法とも従来とは大きく異なる新しいタイプのハウスを検討してきました。実用規模で建設実証したところ、低コスト化に有効であることがわかりました。

## 導入した新材材・新工法

基礎工法では、土を掘らずにパイプを4方向に斜めに打ち込む、パイプ斜杭打込み基礎（図1）、屋根構造部材には薄板軽量形鋼（C型鋼）を採用しました（図2）。この部材は成型と同時に精度の高いパンチング穴加工ができ、部材の製造工場から建設現場へ直送が可能です。作業工程が多い屋根部については、屋根構造を薄板軽量形鋼でユニット化し（4.5m×9.0m）、地上で必要部材を組付けた後、クレーンでつり上げて組立てる手法（屋根ユニット工法）を導入しました（図3）。



図1 パイプ斜杭打込み基礎  
長さ120cmのパイプを四方に打込み、地上部をコンクリートで固める。

図2 薄板軽量形鋼  
(89mm×40mm  
(45mm)×1.6mm、  
亜鉛メッキ (Z27))



図3 屋根ユニットのクレーンつり上げ  
(天窗部材はすでに取り付けられている)

## 建設実証の概要

実証ハウスは丸屋根型で、軒高3.5m、面積972㎡で、天窗は片側開閉式、側窓はフィルム巻上式です。外周部をブレースで補強し、設計強度は、耐風性50m/s、積雪荷重30kg/㎡、作物荷重15kg/㎡です。屋根部の被覆資材には10年展張型PO系特殊フィルムを使用しました。

従来の大型硬質プラスチック被覆鉄骨ハウスと比較して、使用鉄重量を従来の約65%に減量でき、建設作業時間を約60%に短縮できました。基礎工事と並行して屋根部の地上組み立て作業が可能で、ハウス本体の建設工期を約35%まで短縮可能と考えられます。

今後、日射環境など実証ハウス内の環境特性を明らかにし、トマト生産ハウスとしての各種問題点を検討して、構造・部材の改良を図ります。

(果菜研究部・栽培システム研究室長 高市益行)

# チャのクワシロカイガラムシに対する品種抵抗性とDNAマーカー

茶樹の枝幹部を吸汁するクワシロカイガラムシは1995年頃から大発生を繰り返しています(写真1)。茶樹は新芽の摘採を目的として厚い葉層をもつ特徴的な樹形に育てられ、葉層下に生息するクワシロカイガラムシ防除には多量の農薬が必要になります。しかし、農薬に依存した防除は環境への負荷や天敵への影響が懸念され、抵抗性品種や在来天敵の保護利用が求められています。



写真1 クワシロカイガラムシの加害状況と介殻内の雌成虫と卵 (右上)

## クワシロカイガラムシの品種抵抗性

品種の違いによって害虫の発生が異なる原因として抗寄生性や抗生性が知られています。埼玉県で育成された「さやまかおり」はクワシロカイガラムシの発生が少なく、この品種は幼虫の発育抑制や雌成虫の蔵卵数(生涯産卵数)が少なくなる抗生性を示します。これらの抗生性を調査し、茶品種の抵抗性を検定する方法が開発されています。

## 「金谷13号」の品種抵抗性とDNAマーカー

「さやまかおり」では抵抗性遺伝子MSR-1が発見され、実用的な選抜マーカーが開発されています。そこで、

遺伝的背景が異なる抵抗性系統「金谷13号」(var. *assamica* 由来)と「さきみどり」の交雑後代を用いて抵抗性の分離とDNAマーカーとの連鎖関係を明らかにしました。「金谷13号」の抵抗性は「さやまかおり」と同じく、幼虫生存率の低下や蔵卵数の低下として現れます。また、抵抗性遺伝子座(MSR-1)と連鎖するDNAマーカーMSRS8Eが「金谷13号」×「さきみどり」のF<sub>1</sub>世代においても1:1分離し(表1)、抵抗性とMSRS8Eの間には連鎖関係が認められました。このように、「金谷13号」を抵抗性親とした場合にもDNAマーカーMSRS8Eが利用できます。また、抵抗性の検定法として蔵卵数の調査に比べて調査が容易な雌成虫の生体重を調査することによって抵抗性の程度を把握する方法を明らかにしました(図1)。農薬に依存しない抵抗性品種の利用に向けて、「さやまかおり」と遺伝的背景の異なる抵抗性素材はクワシロカイガラムシ抵抗性以外の主要形質の改良が可能となります。

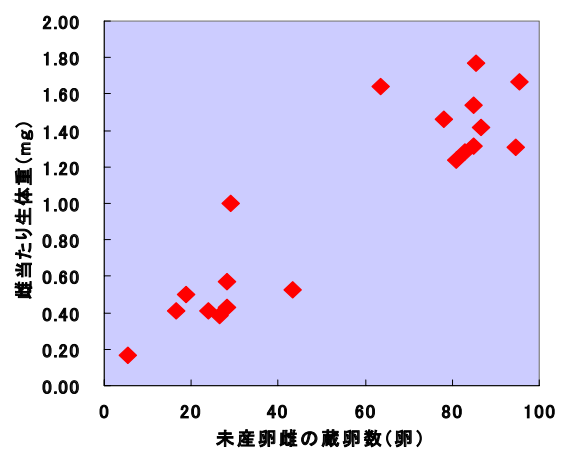


図1 クワシロカイガラムシ雌成虫の蔵卵数と生体重の関係

表1 「金谷13号」と「さきみどり」の交配後代におけるDNAマーカーの有無とクワシロカイガラムシ抵抗性の関係

DNAマーカーの有無	個体数 (蔵卵数の範囲)		
	抵抗性強	抵抗性中	抵抗性弱
有	9 (5.4~29.0)	0	1 (90)
無	0	0	8 (63.5~95.5)

注) DNAマーカーを持つ交配後代にみられた抵抗性弱系統は組み換えが生じた可能性があり、生体重も多い傾向である。

注) 産卵雌の蔵卵数はふ化55日後の調査。

(葉根業研究部・虫害研究室長 武田光能)

# 所の動き

## 高校生のための野菜研究体験セミナー

8月9日（火）から11日（木）にわたって、高校生を対象に、講義・実験・実習等を行い、高校生が野菜研究の現場での体験を通して、農業と科学技術をより身近に感じ、それらに対する興味や探求心をより一層深めるとともに、当研究所の研究活動を広く見聞してもらおう等、広報活動の一環として開催しました。

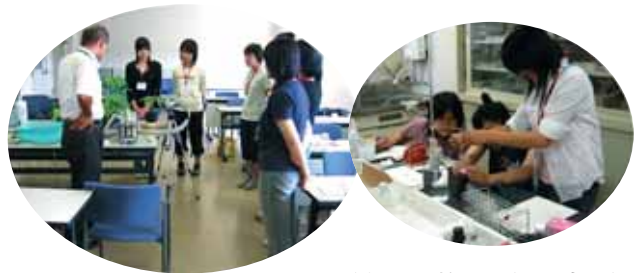
初日は開講式、オリエンテーション、野菜茶業研究所の紹介、遺伝子組換え作物に関する講話、午後から「野菜の光合成を測る」、2日目午前「野菜からDNAを取り出す」、午後「野菜を食害する昆虫とその天敵」、3日目午前「野菜の成分を測る」、午後レポート提出、総合討議、閉講式を実施しました。

受講者は津市、松阪市内所在高校の2年生女子生徒6名および3年生女子生徒1名の計7名で、実験・実習に積極的に参加するなど受講態度は真面目であり、問題は生じませんでした。

また、閉講時のアンケートでは一様に学校では体験できない実験等に良い経験であったとして、満足感を表しています。

この催しは昨年に引き続き2回目で、受講生募集に当たっては昨年の経緯を踏まえ、文書での高校長への依頼とともに、生物等担当の先生に働きかけましたが、高校側のこのセミナーに対する関心度は一部の高校を除いて極めて低く、参加生徒の募集上での問題点となっています。

それでも、今回の応募者は募集人員6名に対し7名あり、さらに、募集締め切り後に1名の問い合わせがあったことは、昨年から前進したことになります。



（企画調整部・松田幸雄）

## 一般公開

### 金谷茶業研究拠点

「見て、ふれて、飲んで楽しむ、お茶の世界」をキャッチフレーズに9月10日（土）、野菜茶業研究所と種苗管理センター金谷農場合同の一般公開が、開催されました。

今年は一般にも広く参加して頂こうと、休日開催とした結果、小・中学生や一般消費者が多数参加され、家族連れで紅茶手作り体験やクイズラリーなどを楽しむ姿が目立ちました。残暑の中、当所育成品種「おくゆたか」（冷茶）などの試飲も渴いた喉を潤し、大変好評でした。また、今話題の「べにふうき」の栽培加工等セミナーでは、立ち見が出るほど盛況で、多くの方が興味深く講演を聴かれました。その他例年どおり研究成果の紹介と実演、茶園土壌・茶葉の成熟度診断、

茶の成分分析と技術相談なども実施しました。また、武豊野菜研究拠点からの協力を得てトマトに関する各種紹介と試食を行い、本所からは葉ボタンの提供もあり、本行事を盛り上げることができました。さらに地元島田市の後援により、お土産やソフトクリーム、地元農産物などの出店もあり、終始会場全体が賑わいました。受付来所者は約540名でした。



（企画調整部・池杉美知男）

### 武豊野菜研究拠点

「野菜づくりのいまー進歩する栽培技術と生産環境ー」をテーマに、快晴のもと、10月27日（木）に開催されました。参観者数は752名、イモ掘りのみ参加の保育園児と保育士さん295名を加えると、1,047名に達しました。中学校1校からも生徒9名、先生4名の参観があり、お茶の葉を使ったしおり作りや機械展示に興味をもち、楽しんでいました。研究展示では、トマトの養液栽培に使われる資材や栽培技術、最新の研究トピックスとして、超低コストハウス・環境制御システムとバイオミネラル技術の2件を紹介しました。温室案内では、新しい工法で建設された超低コストハウスを見学してもらいました。園芸技術相談、メロン試食、キュ

ウリの森の体験、パンジー苗のプレゼント、金谷茶業研究拠点の協力により恒例となったお茶の試飲と、いずれも好評でした。また、半田統計・情報センターの出展、社会福祉法人「わっぱの会」の農産加工品の販売もあり、一般公開を盛り上げてくれました。



（果菜研究部・大森弘美）

## 高度化事業（1609・1652）合同成果発表会「次世代型の耐候性ハウス・環境制御システム」

農林水産研究高度化事業の課題1609「トマト産地のリニューアルに向けた低コスト生産システムの開発（中核機関：野菜茶業研究所）」と課題1652「施設園芸生産のためのユビキタス環境制御システムの開発（中核機関：東海大学）」の合同成果発表会が9月22日に開催され、耐候性ハウスおよび環境制御システムの最新技術が紹介されました。農業行政機関や試験場、JA等団体、関連企業などから264名の参加がありました。

成果説明会（於：武豊町立中央公民館）では、課題1609の成果として、パイプ基礎と屋根部ユニット工法を導入した新工法による鉄骨ハウスが紹介され、課題1652の成果として、個々の環境制御機器にマイコンを装備する新しいタイプの環境制御システムが紹介され

ました。続く見学会（於：野菜茶業研究所武豊野菜研究拠点北圃場）では、新工法ハウスおよび新環境制御システムの実用モデルを視察しました（写真）。両課題について、実用面から多くの質問が出て、栽培施設や環境制御装置の低コスト化の要望が非常に高いことがわかりました。



（果菜研究部・高市益行）

## 課題別研究会「新段階を迎えた臭化メチル規制とその対策技術」

課題別研究会「新段階を迎えた臭化メチル規制とその対策技術」は、10月6～7日に名古屋市で開催されました。臭化メチルの使用が、国際的に承認された用途のみに限られるという、新しい規制段階に入った中で迎えた研究会で、122名の参加者がありました。

初日は、臭化メチルを巡る国際的な動き、代替農薬開発とその普及、物理的防除法開発と普及、土壤伝染性ウイルス病対策技術の開発について、4人の演者から話題提供が行われました（写真）。この中で、臭化メチルの不可欠用途はしばらく維持されるものの、審査はますます厳しくなるとの見方が示されました。また、代替農薬、物理的防除法の普及が着実に進んでいることが報告されました。その一方で、土壤伝染性ウイルス病対策技術は、実用的にはまだ不十分であることが明らかにされました。

第2日は、農業現場への導入の実際について4人の

演者から話題提供が行われました。千葉県長生地域では熱水土壤消毒を基幹としたトマト土壤病害対策技術の普及が進んでいること、岐阜県飛騨地域では土壤還元消毒の導入でトマト褐色根腐病対策が効果をあげていること、高知県では蒸気消毒の導入などが取り組まれていることなどが報告されました。最後に、鹿児島県のメロン農家が、自分の取り組みとしてたどりついた圃場実態に合わせた熱水土壤消毒バージョンについて報告し、参加者に強い印象を残しました。



（果菜研究部・西 和文）

## 課題別研究会「ブランドニッポン6系・野菜」成果発表会

「新鮮でおいしい『ブランド・ニッポン』農産物提供のための総合研究 6系（野菜）」は、野菜茶業研究所を主査場所として平成15年度から17年度までの3年間行われています。研究内容は「健康増進型高品質野菜の生産技術の開発」と「低コスト・省力野菜生産技術の開発」に大きく分けられます。品種の育成や栽培技術の開発、品質評価法の開発など幅広い研究開発が行われ、これまでに多くの研究成果が得られました。そこで、研究成果の周知を図るため、10月13日に飯田橋レインボービル（東京都）大会議室で、標記の成果発表会を開催しました。会議には、公立場所を中心に、独法研究機関、民間、大学等125名の参加者がありました。

発表会では、①有機物施用の機能解明とその利用（中央農業総合研究センター 木村武）、②色素リコペンを多く含むトマト品種を作る（東北農業研究センター 由比進）、③カラフルポテト次世代の到来（北海道農業研究センター 高田明子）、④「湘南ネギ」の新品種

育成、作期拡大及び新需要開拓（神奈川県農業技術センター 北宜裕）、⑤省力的な短節間性カボチャの品種育成と栽培技術の開発（北海道農業研究センター 杉山慶太）、⑥房どり収穫に適した短節間ミニトマトの育成（長野県中信農業試験場 松永啓）、⑦作りやすく使いやすい短葉性ネギの開発（野菜茶業研究所 若生忠幸）の7題について講演が行われ、15題のポスター発表も行われました（写真）。会場にはテレビや新聞などの報道機関も詰めかけ、野菜の研究に対する関心の高さが感じられました。



（研究推進事務局・機能解析部・永田雅靖）

# 所の動き

## 課題別研究会「施設を中心とした野菜生産の多様な展開と対応する新技術の開発方向」

10月18～19日に武豊で開催され、都道府県関係者等を中心に140人が参加しました。トマトを中心として、小規模から超大型までの生産動向と、それに対応する新技術開発方向について話題提供と討議が行われました(写真)。演題と演者は、生産状況については、① トマト産地における生産の動向と生産者の技術開発へのニーズ(熊本県農業研究センター 森田敏雅)、②農と食への取り組み(JAあいち知多 山口清隆)、③多品目野菜生産有限会社「コスモファーム」の販売と経営(久留米市 稲吉慶介)、④生鮮トマトの需要創造へ向けて(カゴメ(株) 佐野泰三)の4題、新技術開発では①中山間地域の活性化を目指した少量多品目野菜生産(近畿中国四国農業研究センター 尾島一史)、②山間の傾斜地を利用したトマトの施設生産(近畿中国四国農業研究センター 東出忠桐)、③気象条件を生かした夏秋イチゴ生産(東北農業研究センター 今田成雄)、

④低段密植栽培による新たなトマト生産(九州沖縄農業研究センター 渡辺慎一)、⑤高軒高施設を利用したトマト生産(野菜茶業研究所 鈴木克己)の5題でした。講演の中、直販参加農家を最初の1,200戸から厳しく選別して600戸に減らして品質を保ち成功につなげたJAアグリタウン「げんきの郷」、3戸の農家夫婦が役員となって会社化し、北海道でも葉菜生産を始めて、4億円を越す総販売額の福岡「コスモファーム」など、元気な生産・販売者の姿が参加者に強く印象付けられました。



(果菜研究部・上原洋一)

## 平成17年度革新的農業技術研修(高度先進技術研修)

農林水産省からの委託事業による標記研修が、本所(安濃)において、「野菜病害の現状と最新対策技術」をテーマに、10月20～21日の2日間実施されました。20府県から26名の普及担当の方々に参加し、病害抵抗性育種の現状、臭化メチル代替技術、土壌伝染性ウィルス病、レース分化、種子伝染性病害について等、現在関心の高いテーマについて講義を行いました。また、熱水土壤消毒の実演・見学や(写真)、桑名地域農業改良普及センターと地元農協の協力を得て、桑名郡木曾岬町のトマト農家において、黄化葉巻病とその対策

について現地見学を行いました。この研修で学んだことが、各地域・現場で実を結ぶことを期待しています。



(企画調整部・十島 博)

## 特許・実用新案・著作権(出願)

(平成17年8月1日～平成17年10月31日)

種類	件名	発明者	出願番号	出願年月日	備考
特許権	血圧調整剤及びこの血圧調整剤を含有した飲食品	山本万里、九州大学	特願2005-234238	平成17. 8. 12	
特許権	飲料及びその製造方法	山本万里、アサヒ飲料(株)	特願2005-249681	平成17. 8. 30	
特許権	鼻用組成物	山本万里、(株)ツムラ	特願2005-268646	平成17. 9. 15	
特許権	鎮痒剤組成物	山本万里、(株)ツムラ	特願2005-268645	平成17. 9. 15	
特許権	バイオミネラル含有物の製造方法および有機養液栽培法	篠原 信、上原洋一、河野真人、岩切浩文	特願2005-309250	平成17. 10. 25	

## 育成者権(出願)

(平成17年8月1日～平成17年10月31日)

作物名	品種名	出願年月日	農林登録番号	旧系統名	育成場所及び育成者
はくさい	はくさい中間母本農8号	平成17. 8. 11	はくさい中間母本農8号	ハクサイ安濃10号	野菜茶業研究所(安濃) 由比 進、佐藤隆徳、釘貫靖久、鈴木 徹、飛驒健一、吉川宏昭、西畑秀次、塚崎 光、畠山勝徳、石田正彦



# 人の動き

## ●異動

(平成17年8月2日～平成17年10月31日)

発令年月日	氏名	新所属	旧所属
※H17. 4. 1	中野 有加	果菜研究部主任研究官(栽培システム研究室)	果菜研究部(栽培システム研究室)
	山口 博隆	機能解析部主任研究官(育種工学研究室)	機能解析部(育種工学研究室)
H17. 9. 20	上田 浩史	機能解析部(遺伝特性研究室)	臨時的任用(平成17年9月23日まで)
H17. 9. 24	國久美由紀	育児休業(平成18年1月31日まで)	機能解析部(遺伝特性研究室)
	上田 浩史	機能解析部(遺伝特性研究室)	臨時的任用(平成18年1月31日まで)
H17. 9. 26	出村谷優子	総務部会計課(審査係)	臨時的任用(平成17年10月8日まで)
H17. 9. 30	山下謙一郎	退職(任期満了)	葉根菜研究部(ユリ科育種研究室)
H17. 10. 1	池杉美知男	企画調整部養成研修課専門職(教務)	企画調整部連絡調整室茶業分室長
	高橋 康浩	企画調整部連絡調整室茶業分室長	花き研究所総務課会計係長
	佐藤菜央実	総務部金谷総務分室(庶務係)	総務部金谷総務分室(会計係)
	大迫 宏征	総務部金谷総務分室(会計係)	総務部武豊総務分室(会計係)
	山下謙一郎	葉根菜研究部主任研究官(ユリ科育種研究室)	採用
	荒木 陽一	果菜研究部上席研究官	九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部施設野菜栽培研究室長
	佐々木英和	果菜研究部主任研究官(栽培システム研究室)	独立行政法人国際農林水産業研究センター生物資源部主任研究官
	物部真奈美	機能解析部(茶機能解析研究室)	任期付研究員(平成20年9月30日まで)
	古谷 茂貴	九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部施設野菜栽培研究室長	果菜研究部上席研究官
H17. 10. 9	早崎 尚美	育児休業(平成18年8月11日まで)	総務部会計課
	出村谷優子	総務部会計課(審査係)	臨時的任用(平成18年8月11日まで)

※遡及発令

## ●表彰

(平成17年8月1日～平成17年10月31日)

種別	氏名	所属	業務等	年月日
日本育種学会奨励賞	田中 淳一	茶業研究部	DNAマーカーの茶育種の利用に関する研究	H17. 8. 20

## ●海外出張・派遣

(平成17年8月1日～平成17年10月31日)

所属	氏名	目的	行き先(国名)	期間
葉根菜研究部	東尾 久雄	国際シンポジウム	カナダ	H17. 8.17～H17. 8.22
果菜研究部	西 和文	臭化メチル技術選択肢委員会	オーストラリア	H17. 8.27～H17. 9. 5
機能解析部	布目 司	RNAサイレンシングによる高等植物の遺伝子発現制御に関する研究	アメリカ	H17. 8.31～H18. 8.30
葉根菜研究部	川頭 洋一	IWGPVFFVシンポジウム	イタリア	H17. 9. 3～H17. 9.10
果菜研究部	坂田 好輝	第3回国際ユリ科野菜シンポジウム	オーストラリア	H17. 9.10～H17. 9.17
機能解析部	本多 一郎	第2回国際ナスゲノムワークショップ	イタリア	H17. 9.24～H17.10. 1
機能解析部	菊地 郁	第2回国際ナスゲノムワークショップ	イタリア	H17. 9.24～H17.10. 1
果菜研究部	齊藤 猛雄	海外遺伝資源共同調査事業(野菜)	ミャンマー	H17.10.12～H17.11.13
果菜研究部	本多健一郎	国際ワークショップ	台湾	H17.10.17～H17.10.21
茶業研究部	根角 厚司	国際シンポジウム	韓国	H17.10.17～H17.10.21
茶業研究部	松永 明子	国際シンポジウム	韓国	H17.10.17～H17.10.21

# 人の動き

## ●特別研究員等

(平成17年8月1日～平成17年10月31日)

項目	氏名	受入れ研究室名	課題名	期間
非常勤研究員	浅沼 伸吾	葉根菜研究部 作型開発研究室	葉根菜類の生育モデル開発に関する研究	H17.10. 3～H18. 3.31
非常勤研究員	畔柳有希子	葉根菜研究部 土壌肥料研究室	露地野菜における環境負荷低減型 土壌管理技術の開発	H17.10. 3～H18. 3.31
非常勤研究員	根来 里美	機能解析部 育種工学研究室	野菜DNAマーカーの効率的検出 プロセスの構築	H17.10. 3～H18. 3.31
農研機構特別研究員	岡田 典久	機能解析部 茶機能解析研究室	茶葉中抗アレルギー成分の利用技術の開発	H17.10. 3～H18. 3.31
非常勤研究員	渡瀬 智子	機能解析部 収穫後生理研究室	野菜の収穫後生理機構の分子生物学的解明	H17.10. 4～H18. 3.31

## ●依頼研究員

(平成17年8月1日～平成17年10月31日)

所属	氏名	受入れ研究室名	課題名	期間
東京都中央農業改良 普及センター	高木 章雄	果菜研究部 栽培システム研究室	施設トマトにおける省力栽培技術 の習得	H17. 8.22～H17.11.18
群馬県中部農業総合事務所 渋川地区農業改良普及センター	唐澤 智	葉根菜研究部 生産システム研究チーム	軽石土壌における軟弱野菜の適正 施肥と堆肥利用技術の検討	H17. 9. 1～H17.11.30
群馬県農業技術センター 生産技術部	渡辺 悟	機能解析部 生育生理研究室	アブラナ科野菜の花芽分化と抽苔 生理並びに脱春化条件の解明	H17. 9. 1～H17.11.30
佐賀県茶業試験場	山口 史子	機能解析部 茶生理遺伝研究室	施肥削減条件下における被覆による 樹勢低下要因の解明	H17. 9. 1～H17.12.28
福井県農業試験場	畑中 康孝	果菜研究部 ナス科育種研究室	TMV等病害抵抗性を有するトマ ト新品種の育成技術の習得	H17. 9.29～H17.12.28
新潟県農業総合研究所園 芸研究センター	濱登 尚徳	果菜研究部 ナス科育種研究室	ナスの新品種開発に関する研究	H17.10. 1～H17.12.28
宮城県農業・園芸総合研究所	吉田 千恵	機能解析部 野菜機能解析研究室	野菜の品質評価及び野菜の機能性 について	H17.10. 1～H17.12.28
飛騨地域農業改良普及センター	佐藤 博	機能解析部 野菜機能解析研究室	ほうれんそうの機能性解析技術の 習得	H17.10.17～H17.12.16

## ●技術講習

(平成17年8月1日～平成17年10月31日)

所属	氏名	受入れ研究室名	課題名	期間
長崎県中央農業協同組合 北部営農センター	吉田 龍実	茶業研究部 製茶システム研究室	茶製造等における情報処理技術の 習得	H17. 8. 1～H17.12.20
愛媛大学農学部	稲次 祐	果菜研究部 生育特性研究室	トマト養液栽培の管理法と生育・ 果実調査法の習得	H17. 8.29～H17. 9. 2
佐々木製茶株式会社	渡邊香菜子	茶業研究部 製茶システム研究室	茶の科学的品質評価法の習得	H17. 9. 1～H17.10.31



### 野菜茶業研究所ニュース 第17号【2005年(平成17年)12月発行】

編集・発行 独立行政法人 農業・生物系特定産業技術研究機構 野菜茶業研究所

〒514-2392 三重県安曇郡安濃町大字草生360番地

TEL.059(268)4626 (情報資料課) FAX.059(268)3124 Web URL:<http://vegetea.naro.affrc.go.jp/>